

第20節

बिले बतोरुक्रमविक्रमान् ये
न शृण्वतः कर्णपुटे नरस्य ।
जिह्वासती दार्दुरिकेव सूत
न चोपगायत्युरुगायगाथाः ॥ २० ॥

*bile batorukrama-vikramān ye
na śṛṇvataḥ karṇa-ṭe narasya
jihvāsati dārdurikeva sūta
na copagāyaty urugāya-gāthāḥ*

bile—へビの住む穴; *bata*—～のような; *urukrama*—すばらしく振る舞う主; *vikramān*—力;
ye—これらすべて; *na*—決して～ない; *śṛṇvataḥ*—聞いた; *karṇa-ṭe*—耳の穴; *narasya*—そ
の人間の; *jihvā*—舌; *asati*—無価値; *dārdurikā*—カエルの; *iva*—まさにそのような; *sūta*—ス
ータ・ゴースヴァーミーよ; *na*—決して～ない; *ca*—もまた; *upagāyati*—大声で唱える;
urugāya—歌う価値のある; *gāthāḥ*—歌。

人格主神の力やすばらしい行動をたたえる言葉を聞かず、主に関する価値ある歌を語
ることも大声で唱えることもしない者は、へビの住む穴のような耳とカエルの舌をもつ
人間と見なされます。

要旨解説

主への献愛奉仕は、体全体あるいは一部を使ってなされます。それは精神魂にそなわる
超越的かつダイナミックな力の現われです。だからこそ献愛者は主への奉仕に100%没頭し
ます。献愛奉仕は、体の感覚が主との関係をとおして浄化されたときにでき、感覚の力す
べてを使って主に奉仕をすることができます。ですから感覚とその動きは、感覚満足のた
めだけに使われていれば、不純で物質的な状態にあります。浄化された感覚は、感覚を満
たすためではなく主への奉仕に使われるようになるものです。主はすべての感覚をそなえ
た至高の方であり、その主に仕える召使いも、主の部分体ですから、同じ感覚をそなえて
います。『バガヴァッド・ギーター』が説明しているように、主への奉仕は「感覚を完全
に浄化するための使い方」です。主は感覚すべてを使って教えをさずけ、アルジュナも感

覚すべてを使ってその教えをさずかり、こうして師と弟子のあいだで感覚と理論にささえられた完璧な交換が行なわれました。精神的な理解というのは、宣伝するしか能のない者たちが言う「師から弟子への電気ショック」というばかげたものではありません。すべては感覚と理論をとおしてなされる完全な交換であり、服従心と真実であってこそはじめて可能になります。『チャイタンニャ・チャリタームリタ』でも、「知性とすべての感覚を使って主チャイタンニャの教えを受けいれよ、そうすることで偉大な使命を理論的に理解できる」と言われています。

不純な生きかたをすれば、どの感覚も俗なことにしか使われません。『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』について主から聞くという主への奉仕に耳を使わなければ、その耳の穴はごみくずで詰まっています。ですから、『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージは、全世界で声を大にして広められなくてはなりません。それこそが、そのメッセージを完璧な情報源から真に聞いた純粋な献愛者の義務でもあります。なにかをだれかに話したい、とだれでも思いますが、ヴェーダの智恵という話題を話す訓練を受けていないために、話すのは無意味なことばかりで、人々も感覚を正しく使わずにそんな無駄話を聞きつづけています。同じように、世界中の人々も主にまつわる超越的な話題を聞くよう教わらなくてはなりませんし、そうなるように献愛者も大きな声で話さなくてはなりません。カエルが大声で鳴く結果、その声を聞いてやってくるヘビに食べられてしまいます。人間の舌はとくにヴェーダの聖歌を唱えるために与えられているのであり、カエルのようにケロケロと鳴くためではありません。この節で使われている *asatī* (アサティー) にも重要な意味がこめられています。これは、娼婦になった女性を指します。娼婦には女性特有のうるわしい名声はありません。同じように、ヴェーダ聖歌を唱えるための舌であっても、俗なたわごとだけに使っているのであれば、娼婦と見なされるのです。